

関西を創った先人の足跡 ● 第9回「歴史街道」を行く

アジアそしてヨーロッパにつながる「海の道」 東洋のベニス・堺

鉄砲・三味線・ピロート・ラシャ・サラサ・南蛮銅・茶道
…発祥を堺とするものはこのように枚挙にいとまがありません。「ものの始まり、みな堺」という諺に語られるように、中世から近世にかけての堺は、日本国内で類なき経済的繁栄を成し遂げた富と文化の集積地でした。海外貿易の発着拠点としてエネルギーに発展する堺に魅せられて諸国から集まった人々も多く、進取の気性に富んだ自由な町文化が開花。東洋のベニスと称された堺。堺は戦国動乱の世にあって、これに巻き込まれない平和な自治都市でもありました。



中世日本から世界への表玄関、堺港の繁栄

ヤマトから海の道を辿り… 堺の曙

堺には百舌島を中心として南北4.5km、東西4kmの台地上に、仁徳天皇陵や敏達天皇陵などに代表される古墳群が散在していますが、堺はこれらを造成した政治権力にとっての驛元であったと考えられます。当時の外交ルートは瀬戸内海から九州北部を経て朝鮮半島に至る海の道が中心でしたが、当然、大阪湾沿岸の港はヤマトを代表する政治的要港として重要な位置付けをもっていました。

律令時代の幕開けとともに日本は国家としての体制を整えてゆきますが、「さかい」の地名もこの頃から使われたようです。飛鳥、藤原、難波、平城の都は住の江と呼ばれた大阪・堺の海岸を通じて交通していました。

平安時代の堺について堺としての資料はありませんが、堺と奈良を結ぶ古代以来の政治・経済・外交上の重要ルートであった長尾街道や竹内街道の西の起点・到達点であることから、瀬戸内海を渡ってくる年貢などの物資の陸揚げ地であったと考えられるでしょう。鎌倉時代になると、「堺津」という港としての記事が文献に初見できます。瀬戸内海を中心として鑄造品販売をした「廻船鑄物師」集団の母港であったという記事です。

こうして堺は物資の集散地としての機能を高めつつ、南北朝時代には南朝に味方する熊野の海賊衆や四国・九州の南軍との連絡に欠かせない港ともなりました。以降、堺は商船が活発に往来する商港として発展しながら、時の権力者たちの兵が結集する政治的要港ともなりました。

世界への雄飛、遣明貿易

堺の繁栄を何より決定づけたのは、遣明貿易の発着地となったことでした。室町幕府が開始した日明貿易は、当初、堺と並んで二大要港といわれた兵庫港を窓口として、ここから瀬戸内海を通る航路で行われていました。しかし国内を二分して戦われた応仁の乱によって、兵庫港はくりかえし戦火を浴び港としての機能を喪失。さらに瀬戸内海も兵船の往来が激しくなったことから、幕府はついに文明元年(1469年)、遣明船の福岡コースを南九州から土佐沖を経て紀淡海峡を通して堺に入港することに変更。これより堺が遣明船の発着地となり、ほぼ独占的に貿易に関わる基地としての活況を呈してゆきます。

これより以前にも堺商人は大内氏や細川氏と提携して、明や朝鮮、沖縄、東南アジア方面に独自のルートを持っていましたが、遣明船がもたらした経済的・文化的波及効果ははかり知れないものがありました。

文明8年(1476年)の堺からの第1回遣明船は四国南方を通過して中国の寧波(にんぼう)に渡り、2年後に帰国。第2回目も堺商人が独占しますが、明応2年(1493年)の第3回目には博多商人と争い、堺商人は請負額1000貫文も上乗せして堺出帆を死守しています。莫大な富をもたらす海路の獲得をめぐる博多港は常に堺のライバルであったようです。



源頼朝



千利休(宗義)



海の道が運んだ富とロマンと

日明貿易がもたらした利益は膨大なものでした。輸入品が墨・筆・絹・書籍・漢方薬・金魚・砂糖など実用品であるのに対して、輸出品は銅・硫黄・刀剣類・金襴などの高級品だったため、その差益は莫大でした。

堺商人は朝鮮貿易にも手を出しますが、こちらは地の利を得た博多商人が主役で、むしろ琉

球との貿易が島津氏の厳しい統制にも関わらず果敢に進められました。

海路には海賊や倭寇が出没し不法なふるまいが横行したり、また貿易の利権にからんでのかけひきや競争もありましたが、堺商人は高い才覚と気遣いで海外発展を成し遂げてゆきます。やがて豪商が輩出し堺は富と文化の先進都市となりますが、それは海外に雄飛した男たちのロマンがたくましく実現した、新しい都市の出現でもありました。

南蛮貿易で極めた堺港の栄華と夢…

「環濠」を備えた自治都市としての堺

永禄年間に堺を訪れた宣教師ガスパル・ピレラは当時の堺の様子を「この町はイタリアのベニスのように執政官によって治められている。もっとも富裕な商人が住み、自由市としての多くの特権と自由をもち、共和国のような政治を行っている」と本国に報告。また宣教師ルイス・フロイスは「堺の周囲には深い濠がめぐらされ、木戸を構えて夜は閉ざされる。住民は平和安住を求め、濠の中では調味方でも礼を尽くすが、一步外に出れば果たし合いをする」と書いています。

執政官というのは堺の自治を執行していた会合衆と呼ばれる豪商36人のことで、戦国の世でありながら、彼らは豊かな経済力を背景に「環濠」によって町を防御し、一種の治外法権的な平和郷をつくっていたのです。

この頃の堺は、現在の阪堺線高須神社駅あたりから御陵前駅周辺の南北約3km、大道筋を中心に東西約1kmで、西は海に面し、他の三方に濠をめぐらしていました。この地域には中世都市・堺の遺跡が多く残っています。

四国阿波の三好氏が海船浜（今の桜の町西3丁目周辺）に建設し、摂津、河内、和泉の本城と



した海船政所跡や鉄砲射的場跡、豪商である山口家邸宅、わか国にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルを記念したザビエル公園、中世の堺の実像を明らかにさせる堺都市周濠遺跡、このほか豊かな財力で次々と建立された多くの寺や当時活躍した堺人の住居跡など、豊富な遺跡が堺の栄華を今に伝えています。

権力に与せず、海を越えて一堺の自由人たち

国際都市・堺は国内外の経済・文化・人が出会い、交流するエネルギーに満ちた町でした。あらゆる文芸・文化の花が豊かに咲き、「泉南仏国」とか「医者と坊主と薬屋の町」といわれるほど宗派宗教、学問がまさに雑然した町でした。権力に与しない自由な気風が生まれ、多くのユニークな人材が輩出しています。

茶道の千利休や頓智の曾呂利で有名な曾呂利新左衛門、一休宗純など、彼らは堺の気骨を象徴する人といえるでしょう。

明よりも遠くポルトガルやイスパニア、東南アジア各地との南蛮貿易が本格的に始まると、大海のかなたに新しい富を求めて乗り出す貿易家たちがいきました。

鉄砲又と呼ばれた鉄砲術を広めた橋屋又三郎も堺の商人。南蛮商人より銅銀分析法「南蛮吹き」を学んだ住友寿清はこれにより現在の住友家の基盤を築いたともいえます。ルソン（呂宋）助左衛門は百余人もの浪人を率いてルソンに出かけ、おどかして和を請わしめたとありますが、たびたびルソンから唐傘、香料、壺を持ち帰り大金持ちになっています。やがて秀吉の逆鱗にふれ一家追放の憂き目に会いますが、今度はカンボジアに逃れ、彼の地で国王の信任を得て日本人渡航者の管理にあたるなど、海外を股にかけた豪傑ぶりです。朱印船貿易家の西のいす（頼子）はイスパニア語に通じルソンに3度渡航するなど、フィリピンの国情にも詳しく、いわば徳川家康への海外情報提供者でもあったようです。安南・シヤムと貿易をした豪商具足屋の一族は今のベトナムのフェーファーに住み一門は大いに栄えたとのこと。なお、フェーファーやツーランの日本人町には200人以上もの日本人が住



んでいたといわれています。

戦国の世を通じて常に世界への大玄関であり続けた堺の町も、大坂夏の陣で大部分が焼失。豪壮な邸宅や豊かな財宝の数とともに、中世都市としての堺はついに終焉の時を迎えたのでした。しかも鎖国体制とともに海外貿易港として

栄えた堺港は衰微、商都としての地位を大坂に譲っていきます。

海を越えた多くの堺人が鎖国の犠牲になりました。南方に栄えた日本人町のほとんどの人は帰国できず、現地に同化。ザビエルの堺での身元引受人ともいえる豪商日比屋了慶の孫、レア

ウンはキリシタン迫害でマカオで客死。栄華を誇った具足屋の一族もフェーファーの共同墓地で異国の土に――。

堺港から南方へと多くの和船や外洋船が行き交った海の道は、中世から近世へと一気に駆け抜けた日本というエネルギーを限りなく擁護し、またその歴史を見つけた道でもあったといえるでしょう。

世界とのネットワーク化をめざす——国際交流都市・堺

さて、現代の堺では、関西国際空港の建設をステップに加速度的に飛躍しようとしている大阪湾岸地域の主要都市のひとつとして、さまざまなプロジェクトが進行中です。臨界部に新都市の形成をはかる臨界新都市整備構想、ハーバーライト21構想、コスモポリス建設事業…など、産業・文化・情報機能が整備された街づくりが進められています。

その歴史が形成してきた自由精神を裏づけとするユニークな文化、「市民」の力で発展してきた堺の独自性は、現代に脈々と継承されているということが出来ます。関西から世界へ…その窓口としての堺。世界とのネットワーク化をめざす国際交流都市・堺に、今、大きな期待が集まっています。

